

O-175 38歳女性の2度の早期流産と出産を通じた妊娠の脈状と予後の考察

○山田恵美^{1,2} 吉岡広記^{1,2}

1) 日本鍼灸研究会 2) 吉岡鍼灸院

【目的】 同一女性の3度にわたる妊娠の鍼灸治療を通じて、妊娠における脈状の意義を考察する。

【対象】 自営業。肥人。不規則な生活を送り、常に寝不足の状態にある。治療は週に4～6回（出産後は月に1～2回）。日頃は、人迎気口診：気虚寒湿のやや逆、六部定位診：肺経虚證。月経周期27～30日。

【流産1】 日頃は月経予定日前に脈證の変化はないが、X年7月下旬は虚劳寒湿の順となった。脈證はそのまま推移し、9週目に稽留流産となった。この間の治療では、1度も気口脈が沈むことがなかった。掻爬手術後より28日で月経が始まり、日頃の脈證に戻った。

【出産】 X+1年2月中旬、月経予定日前より虚劳寒湿の順となったが、治療後に気口脈が沈瀆となった。6週目以降は気虚寒湿のやや逆となった。10月初旬に相当の無理をし、臍帯下垂に加え逆子となり、下旬に帝王切開となった。出産後は虚劳寒湿で推移し、授乳中ながらX+2年6月中旬より月経が再開した。

【流産2】 X+2年8月中旬、月経予定日頃より虚劳虚寒の逆となり、つわりもなく6週目に流産となった。この間の治療では、人迎気口ともに脈が沈むことはなかった。流産後は出産後の脈證に戻った。

【考察】 上記3例は、月経予定日頃より日頃の陽虚から陰虚に転じており、予後が悪い。その中で腎の消耗度の差が道を分けたと考えられ、それが脈状の違いに現れていると認められた。治療後に陽虚となれば、腎の損耗は深刻ではなく、辛うじて妊娠を維持する力があると判定された（妊娠時の陽虚は、腎の旺気を示すと考えられる）。6週目以降の陽虚への転換は、腎の安定を示すと見られるが、気口脈が常に瀆脈を呈し、1度も滑脈とならなかったことが、腎がなお盤石ではなく、平時の消耗を如実に現していると判断された。2回目の流産は、腎の回復が不完全な中での妊娠のために、腎虚が進み虚極としての陰虚風動を呈したものと考えられた。

【結語】 気口脈の浮沈滑瀆と治療後の脈状変化は、妊娠の予後を診るうえで指標となることが示唆された。

O-176 肥瘦と右手気口脈の関係から見た妊娠の脈状と予後の考察

○吉岡広記^{1,2} 山田恵美^{1,2}

1) 日本鍼灸研究会 2) 吉岡鍼灸院

【目的】 妊婦 8 名の鍼灸治療を通じて、肥瘦と気口脈の関係から妊娠における脈診（人迎気口診）の意義を考察する。

【気口浮】 28 歳瘦人：妊娠初期は、子宮が腫れ、日頃の虚勞寒湿の順（気口瀼）。治療後は必ず気口脈が沈み、ほどなく虚勞寒湿のやや逆（気口滑）となり安定。自然分娩。

33 歳瘦人：妊娠初期より日頃の虚勞寒湿の順。治療後に気口が沈脈となることは 1 度もなかった（平時は沈む）。24 週より右下肢の強いしびれと痛みを発症。36 週 2 日で胎児にチョコレート嚢胞を蹴破られ、3 日後に帝王切開。

38 歳肥人：虚勞寒湿の順と虚勞虚寒の逆→気口脈沈まず。流産（山田報告症例）。

【気口沈】 25 歳瘦人：日頃は虚勞寒湿の順。妊娠初期より気虚寒湿の順（気口滑）。自然分娩。

39 歳肥人：妊娠初期より日頃~~は~~の気虚寒湿の順。つわりが重い日は気虚寒湿のやや逆または逆（人迎気口ともに瀼）。自然分娩。

38 歳肥人：気虚寒湿のやや逆→帝王切開（山田報告症例）。

32 歳瘦人：妊娠初期は日頃の気虚寒湿のやや逆（気口瀼）。出産予定日を 9 日過ぎたため再来院。初期と同じ脈證。治療後に虚勞寒湿の順となり、翌日も虚勞。翌々日に陣痛促進剤を投与（投与後 3 時間で出産）。

35 歳肥人：逆子のため 37 週で来院。気虚寒湿のやや逆。5 回の治療でも気口は浮脈とならず、帝王切開。

【考察】 上記症例より次のことが析出される。妊娠初期から 36 週頃までは、胎児を保育するために肥瘦に関わらず気口脈沈滑（陽虚）がもっともよい。浮脈を呈する場合でも、治療後に沈脈となれば予後は比較的よいが、変化の見られない時は注意を要する。特に肥人は、平時と妊娠時とを問わず浮脈が逆證（陽虚が順）であるため、なおさらである。また、少血を示す瀼脈の時は、何らかの問題が生じている、または生じる可能性があると考えべきである。37 週以降は、出産のために浮瀼がよい。

【結語】 肥瘦と浮沈滑瀼を関係づけ、治療前後の脈状変化を合わせ診ることで、一定の予後判定が可能となることが示唆された。